

第34回 NSRI都市・環境フォーラム  
(no.274)

『なぜ「イギリスの家は古くて豊かで  
日本の家は便利で貧しい」のか』



講師

井形慶子氏

作家 月刊情報誌「ミスター・パートナー」編集長

日時 2010年10月20日(水)

場所 NSRIホール

## 目 次

1. 井形慶子自己紹介とともに、なぜイギリスという国に魅力を感じるのか。 3
2. 日本人とイギリス人の住まいに対する価値観の違い。なぜ古家は壊されるのか？  
イギリス人はどんな家に価値を感じるのか？など。 5
3. 井形慶子が、住みたい町、No 1 の吉祥寺に 500 万円の老朽物件を購入し、  
300 万円でフルリフォーム。ロンドン風フラット完成。 8
4. どういう家の持ち方、買い方、家に対する考え方を持つと、日本人は  
幸せになれるのか。 10
5. イギリスで売り家になっている魅力的な家。(借地権 999 年の古城、  
湖が見えるコッツウォルズの古城) 13
6. イギリスの家は手を加えると (DIY でリフォーム) 価値が上がる。  
安く買い、高く売る財テクだった。付加価値がつくイギリスの古家。 19
7. 家づくりとは、住まいに命を吹き込む作業 28

### 井形慶子 (いがた・けいこ) 氏 作家 月刊情報誌「ミスター・パートナー」編集長

長崎県生まれ。大学在学中から出版社でインテリア雑誌の編集に携わる。その後、世界 90 ヶ国に流通する外国人向け情報誌を創刊。28 歳で出版社を立ち上げ、英国の生活をテーマにした情報誌「ミスター・パートナー」を発刊する。同誌編集長。90 回を超える渡英経験を通じ書き下ろした著書は多数。ザ・ナショナル・トラストブランド顧問。海外特派員協会会員。(財)住宅リフォーム・紛争処理センター第 27 回住まいのリフォームコンクール審査委員会委員就任。

#### < 著書等 >

2009 「老朽マンションの奇跡」: 新潮

2000 「古くて豊かなイギリスの家 便利で貧しい日本の家」: 新潮文庫

2010 フォトブック「イギリス式農家の整理術」: 宝島社

「日本人の背中」: 集英社文庫、「あてにしない生き方」: 中経出版

## 『なぜ「イギリスの家は古くて豊かで 日本の家は便利で貧しい」のか』

谷 皆様、大変長らくお待たせいたしました。ただいまから第34回都市・環境フォーラムを開催させていただきます。本日は、お忙しいところお越しくださいませ、まことにありがとうございます。

本日のご案内役は、私、広報室の谷礼子でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、本日は、ご案内のとおり、月刊情報誌「ミスター・パートナー」編集長でいらっしゃる井形慶子先生からお話をいただきます。

本日は、『なぜ「イギリスの家は古くて豊かで 日本の家は便利で貧しい」のか』と題してご講演をいただきます。

井形先生は、「ミスター・パートナー」の編集長でいらっしゃると同時に、ご自身でもご執筆活動を続けていらっしゃいます。そしてまた、何十回となくイギリスにも行っていらっしゃるしまして、日本人とイギリス人の家についての考え方の違いについて実感をしていらっしゃいます。ご著書の中でもそのことにたくさん触れられていらっしゃいますけれども、本日は生活者の視点に立ってその辺のお話をくださることと、楽しみにしております。

それでは、早速、先生にご登場いただきたいと存じます。皆様、大きな拍手で先生をお迎えください。(拍手)

井形 皆様、初めまして。今ご紹介にあずかりました井形慶子と申します。よろしくお願いいたします。

今日は、以前の私の講演を聞いてくださいました、こちらの広報室の谷さんの方から講演のご依頼をいただきました。余り深く考えずに引き受けたんですけれども、すぐその後で、ホームページなどで、こちらが有名なスカイツリーですとか東京タワーを設計されている会社だということを知り、そして、先程與謝野顧問から今日の皆様のお顔ぶれを見せていただきました。私のお話がどのくらい皆様の心に響くものかわかりませんが、お話をさせていただきます。

私は、ご紹介にあずかりましたように、長く日本とイギリスを行き来しておりまして、

19歳の時からですから、もうかれこれ90回以上、英国の方に行っております。その中でいろいろと感じたことを、今日は私が撮りおろしました英国及び日本の珍しい写真なんかも織りまぜてお伝えしていきます。

私の講演は、耳で聞いて、目で見て、心で何かを感じ取ってお帰りいただくということをテーマとしておりますので、これから1時間半の間、場内を映画館のように暗くさせていただきます。

## 1. 井形慶子自己紹介とともに、なぜイギリスという国に魅力を感じるのか。

(図1)

今日は、『なぜ「イギリスの家は古くて豊かで 日本の家は便利で貧しい」のか』というタイトルのお話をさせていただきたいと思うんですが、最初に谷さんにご紹介いただきましたけれども、改めまして、ここで、私がどういう仕事を普段しているのかということをお聞きしたいと思っております。これは後のお話につながっていくと思っておりますけれども、私は月刊「ミスター・パートナー」という、創刊21年目の英国生活情報誌の編集長をしております。生活者の視点から、イギリスのいろいろな暮らしを伝えておりますが、この雑誌の編集長及び作家をやる中で、いろいろな方々とインタビューでお目にかかっております。

(図2)

例えば、『高慢と偏見』という映画は、英国では大変人気ですね。最近では『ブリジット・ジョーンズの日記』という映画に主演されましたコリン・ファースさんです。それから姜尚中さんですとか、政治家の方々ですね。皆様もよくご存じの方々と、「政治と暮らし」というテーマでお話をさせていただきました。政策は一切聞かず、お小遣いは誰から、幾らもらっているか、服はどこで買うのかとか、そういうことを聞きつつ、この政治家の方が一体何をベースに立っていらっしゃるのか、それを探る対談でしたが、大変好評を博しまして、ラジオでもたびたびオンエアされました。

(図3)

岡田克也さんが困惑気味で写っています。このシリーズというのは政治家の方々のプラ

イベートな結婚生活にまでかなり突っ込んで聞いていくんですね。鳩山さんが、ちょっと余談になりますが、ご自身のご結婚を略奪愛というふうな形でベラベラとお話されまして、それを岡田さんが聞いていた。秘書の方々を全部部屋から出して、カメラマンと私と3人だけで対談をしたということでした。私は、彼がおまんじゅう1個も受け取らない人だというのは聞いておりましたが、ただ、手ぶらでお話を伺いに行くのもなんだなと思っていました。その時、岡田さんは、カエルが大好きで、カエルの置き物を集めるのが趣味だと伺っていました。スタッフに、小指の先ほどのカエルの置き物を売っているお店が吉祥寺にあると聞いたので、それを依頼したつもりだったのが、何を間違えたか、蚊取り線香が入るくらいの大きなカエルを買ってきました。「私は贈り物は一切受け取らないんです」と固辞されているところなのですが、「カエル1個受け取っても、別に賄賂と思われませんか」と私が説得している、その場面でございます。なかなかダンディーな方でございます。

(図4)

石原慎太郎さんとは、東京の新宿の都庁を中心に、裏と表で余りにも街並みがひどいというお話をしておりましたところ、ちょっと機嫌が悪くなりましてね。本のお話になると、すごいイギリスがお好きらしくて、話が弾んだことを覚えております。

(図5)

今、国土交通大臣になられました馬淵澄夫さんです。この方とはいろいろなお話をさせていただきました。同世代ということもあって、共感する部分が多い方です。

さて、こういういろんな方々とお話をする中で、私の視点というのはいつも同じなんです。価値観なんですね。この人たちを動かしている価値観、価値というのが一体どこから来るのかというのを絶えずずっと探っていくわけです。そういうことをもとにして、いつも本を書いております。

(図6)

最近出しました本は、イギリスのいろいろな整理術、収納を書き加えたフォトエッセーと、それから今日発売の『日本人の背中』、そして昨年出版して大変話題となりました、吉祥寺で500万円の老朽物件を買ってリフォームしたというノンフィクションですね。その他、たくさん本を書かせていただいております。

そういう中で、私は、先程のような著名な方もそうですが、恐らく皆様方のどなたかが

顧客とされていたり、ターゲットとしてお考えであられたりというような読者の方々にも多くお目にかかってお話を重ねてきました。ここから家のお話になります。私は実はイギリスに90回以上行っていると言いましたが、「イギリス以外の、趣味は何ですか」と聞かれますと、すかさず答えるのが「家を見ることです」というくらい、無類の家好きなんです。

ですから、いつも人に会う時に、その人がどういう家に住んでいるのかなというのをずけずけと聞いてしまうところがありまして、ある日、読者の方々にアンケートをとりました。「あなたは、もし今、家を建てるとしたら、予算はお幾らくらいでお考えでしょうか」。そうしましたら、80%の方々が、1500万円から2000万円だと回答されてきました。これはくしくも日本で2年前大変売れていましたインテリア雑誌のアンケートの回答と同じでございます。

1500万円から2000万円です。今デフレで住宅も安くなっておりますが、私の印象の中ではずっと、家というのは高い、何故日本の家はこんなに高いんだろうなということがありまして、このアンケートの結果を見て、我が意を得たりという感じでほっとしたのを覚えております。

## 2. 日本人とイギリス人の住まいに対する価値観の違い。なぜ古家は壊されるのか？イギリス人はどんな家に価値を感じるのか？など。

(図7)

さて、私の個人的なお話に移らせて下さい。私は、18歳でこちらの大学に出てきましたが、最初に住んだ家というのが、神奈川県の農家の離れにあります納屋の2階でした。ゴキブリやネズミとかはい回るような、古い古い納屋の2階。家賃が1万円でしたが、いつか東京に家を持ちたい、自分の家を建てたいということをずっと考えていて、家を持つのであれば吉祥寺がいいというふうに長く思っておりました。

今、いろいろなショッピングセンターもオープンしたりして、吉祥寺というのは住みたい町ナンバーワンということで報道されておりますけれども、自然があり、一大商業圏が広がり、400メートル以内ですべて事足りる。吉祥寺の良さを、いろいろな人がいろいろなことを言いますが、私にとっては、何ととっても日本にはない、古いものと新しいも

の、近代と旧式、高齢者と若者、いろいろな価値が共存する町というのが最大の魅力で、居心地がいいなと思うわけです。ここにどうしても我が家を建てたいと思いました。

私が土地を探し始めたのが30代半ばくらいからです。バブルの影響がありまして、武蔵野市の吉祥寺といえはまだまだ土地が高かったのですが、明けても暮れても吉祥寺で土地を探しておりました。

(図8)

知り合いの大手仲介業者の方とやりとりをしている中で、いろんな面白い物件を見させてもらいました。ある晩、この知り合いの仲介業者から、夜の10時過ぎでしたか、電話がかかってきたんです。私は、吉祥寺の中でも特定のエリアを希望しておりましたので、どこでもいいということではなかった。そのため、かなり土地探しというのが難しかったですね。10時過ぎにかかってきた電話というのは、大体出物が出た時の電話で、営業マンが夜中に売ろうかどうしようかと悩んでいる人のところにパッと行って、専任契約をとって、後ろに列をなして待っているお客さんに「出ましたよ」とかかってくる電話が夜10時の電話だというふうに私は認識していました。だから、10時過ぎに電話がかかってきた時に、「出た」と思いましたね。3年越しで探していましたが、それくらい、その時の電話は嬉しかったんですね。「井形さん、井形さんが希望するエリアに土地が出ました」、やったーっという感じですよ。

(図9)

実は吉祥寺は、本町、南町、東町、北町といろいろなエリアがあって、私は吉祥寺の北町の番地限定で探していたんです。やりづらかったと思います。「土地が出ました」、やったー。「で、どうですか」と言ったら、「1つだけ問題がありまして、古家つきなんですよ」と言われたんですね。「あらー」と思いました。私は、古家というからぼろぼろの物件のイメージがあると思ったんですけれども、まあ、行って見てびっくりしました。宮大工が建てられるかどうかというような、歌舞伎門の家だったんですね。

ぼろぼろの古家というふうに聞いた時は、私はそれまでイギリス風のコテージのような古い小さい家を自分の手で建てたいと希望しておりましたので、どうしようかなと思ったわけなんです。その家を見た時に、これだったらジャパネスクに戻ってもいいな、ここをリフォームしてもいいなと思ったんです。というのは、仲介業者の方に案内されて、玄関を入ったんですけれども、歌舞伎門のドアをガラッとあけまして、玉砂利の料亭のよう

な道が続き、玄関は総ヒノキ、柱、つくりつけ収納、棚と、相当古い時に建てられた家だと聞きましたが、寸分の狂いもない。庭を望む和室の方に行きますと、雪見窓とがある。英国英国と言っていた私は、日本のこの古い住宅のよさに打ちのめされました。営業マンも、「井形さん、こんないい家を今ご自身で建てようと思ったら、まず業者さんがいませんよ。大工もいませんよ。幾らかかりますかね」と言います。私は真剣にここを購入しようと考え始めたわけです。

ところが、やはり予算というものがあまして、まだバブルの終わりを引きずってしまっていたので、正直、私の予算の倍くらいでした。このお宅、8000万円ちょっとしたんです。私は、どんなふうに算段しても無理だということで、泣く泣く諦めてしまった。諦めざるを得なかったんです。

ところが、ある日、私のところにまた電話がかかってきて、「井形さんが欲しがっていたあの古家つきの土地なんです、お客さんがご契約されて、ご入居されたみたいですよ」と営業マンに言われまして、心はざわざわするわけです。自分は買えなかったくせに、他人のものなのに、やっぱり何か物すごく引かれるものがある、一体どういう人が住んでいるんだろう、どんなふうに住みこなしているんだろう、見てみたいなというふうにすごく思ったわけです。

(図10)

それで、私は、ある日こっそり、スニーカーのように、意を決してそこを見に行きました。こういうことは本当はやってはいけないと思うんですけれども、気になって気になって仕方がなかったんですね。見に行くと、愕然としました。そこは瓦礫の山だったんです。イギリス人であれば、間違いなく住み継ぐ価値のある、日本のよさを満載したこの家を、購入された方は、古家つきの土地ということで新しい家に建てかえようとして壊されたわけですね。

何度も申し上げますが、イギリスであれば間違いなく手を加え、住み続けられた希少物件だったんです。

日本で、家は消耗品です。服や家電と同じく、スクラップ・アンド・ビルドが続いてきました。私は、そこから社会の大きなゆがみが出ているのではないかと、かねてから思っていました。資源は無駄になり、人々は安い材料に走り、工期も短くコンパクトに、もう職人も要らない。



この間、竹村健一さんの最後の番組にくしくもゲストで呼んでいただきました。その時に伺いましたけれども、「首都圏の産業廃棄物の8割は、井形さん、何だと思いませんか」とお嬢さんから言われまして、「さあ、わかりません」と言ったら、「井形さん、住宅資材なんですよ」と言われたんですね。

今、日本では、量より質の時代に転換しようとしています。2009年、マンション、一戸建てともに中古の成約率が上昇しました。古い物件は安い。リフォーム費用をかければ思いどおりの住まいがつかれる。人気のエリア、特に私が住む吉祥寺などでも、中古物件というのが不足しております。私は、こういう、何か捨てられていくもの、一見価値がないと思われるもの、あるいはされてきたものの中から何か作り出したいなと思って、そして、その後も土地を探し続け、何とか理想の土地を得ることができました。

3. 井形慶子が、住みたい町、No1の吉祥寺に500万円の老朽物件を購入し、300万円でフルリフォーム。ロンドン風フラット完成。

(図11)

私の家づくりの話に戻ります。土地で大枚はたいてしまいまして、上物、建物を建てる費用が1500万円しか出なかったんですね。いろいろなハウスメーカーがあるんですが、予算をアンケート用紙に書いた段階で鼻で笑われて、「ちょっとちは無理ですから、他の工務店さんを当たってください」と言われまして、その中で唯一、今はもうないんですが、大手のハウスメーカーさんが、いろいろないきさつから家を建てるようになったんです。

いろいろないきさつという言い方をしますと、私が本でタイアップしたと思われても嫌なので、内情を言いますと、余り研修をまじめに受けてなかった新入社員の方が、1500万円とアンケート用紙に書いて、理想の家のスケッチを私が持っていったら、「うちではおつりが出るくらい、これだったらできますよ」と私に約束したんですよ。それで、私は土地を購入したんですけど、「そんなの、聞いてない」というふうに後で上司が怒り出して、でも私も困ってしまうので、結局、会社の方が何とかしましようということで家づくりが始まったという経緯なんです。

( 図 1 2 )

私は、何とか古いものを使って、味のある、築年数が経っても、経過年数が趣になる家をつくりたいと思っていました。それには、やはり自然素材へのこだわり、見える部分のパーツをいかにうまくつくるかということが問題だなと思いました。

ところが、予算が限られています。でもどうしてもイミテーションでも暖炉はつくりたかった。この時、びっくりしたんですけど、今でいう古材ですか、そういうものを探して回ったんですが、この暖炉の枠がありますね。これ、私が自分で設計した暖炉が今からできるんですが、この1辺が、世田谷の某雑貨屋さんと言えればいいんでしょうか、建材屋さんと言いますか、若者に非常に人気のインテリアショップで、このぼろぼろの板が1万5000円で売られていたんですね。工事監督と一緒にいったんです。彼、びっくりしていますね。腐ったトタンが2万円で売っているのは、見たこともないと言っていました。それをいろいろな若者が業者さんと一緒に買っているわけですよ。「日本も変わったな」なんて言っていました。

私はそんなお金はかけられないので、このハウスメーカーさんをお願いして、近所の解体現場を教えていただき、そういうところで捨てられる古材を自分で拾ってきて施工していただきました。

( 図 1 3 )

それが暖炉となるわけですね。すべてイミテーションですけども。

( 図 1 4 )

それから、何かリビングにアクセントが欲しいなということで、梁も探したんですが、古民家物というのはやはりブランドなのか、高いですね。それで、今、大工さんが磨いていらっしゃる床柱も、近所の植木屋さんの庭に捨ててあったんですね。それをトラックで拾ってきてまして、そしてこのリビングの柱にしております。

( 図 1 5 )

後で見えていただきますが、古い古い昔の家というのは、梁があるんですね。日本もありますが、その梁も、本物をつけるのは高いので、集成材に色を塗って、そこに殴りを入れました。そして、ニスで汚したりなどして、梁を完成させました。ここに出ておりますのは、構造躯体なんですね。集成材の構造躯体をあえて見せる設計にしてもらいました。

( 図 1 6 )

これは玄関のアプローチです。全て拾ってきたり、安くで見つけたものでやりました。

( 図 1 7 )

この家の外観なんですが、経過年数とともに古さを出したい。ところが、ブリックというのがまた高くて、予算オーバーとなりますので、上の部分は塗装にして、川砂をまぜてもらいました。川砂だと費用は幾らもしないということで、それを塗りました。そして、イギリスの古いコテージを完成させたわけです。

4 . どういう家の持ち方、買い方、家に対する考え方を持つと、  
日本人は幸せになれるのか。

( 図 1 8 )

私がこのような本を書きましたら、たくさんの反響が返ってきたんですが、私は、その中でいろいろな方々のご意見を聞きながら、改めて日本の家がなぜ高いのか、何故スクラップ・アンド・ビルドになるのか、何故私たちは新しいものがいいんだというふうな概念から抜け切れないのか等々を考えました。

( 図 1 9 )

そこで、話題は少しかわりますけれども、それを考え詰めていった時に、1つのとっても面白いサンプルが出てきました。それは、住宅広告なんです。

私は、日本でもイギリスでも、新聞や雑誌の広告、チラシを見るのが大好きです。チラシや広告というのは、社会の価値観といいますか、暮らしぶりというか、そういうものが如実にあらわれていると思うんですね。

こういうことがありました。私の友人がマンチェスターに住んでいました。イギリスに行った時の話なんですが、自分の家を探しておりまして、素晴らしい家が出た、是非契約したい、あなたにも一緒に見てもらいたいと電話がかかってきました。その時、私はたまたまロンドンにいたので、その現場に駆けつけたわけですね。彼は、自分が買おうとしている家に舞い上がっている様子で、私に自慢を始めたわけです。「見てみてください、この玄関ドアの厚さ、この窓枠のフォルム。素晴らしいでしょう、この天井高」と言って、

随分この人はパーツを説明するなと私は思っていたんですね。彼が余りにも舞い上がっているので、私はよく家の全容がつかめず、「ところで、この家というのは、土地は何坪くらいあるんですか」と聞きましたら、彼は変な顔して私を見るんですね。「そんなの、知らないよ」と言うんですよ。「それより、このドアを見てよ。これ、ビクトリアン時代のドアだよ」とか言いながらね。私は、あれ、おかしいなと思いました。彼は証券会社の仕事をする独身だったんですね。もしかしたら、自分の家を物すごく欲しがっていたので、変な業者にだまされているんじゃないかと、日本式に考えたわけです。

そこに案内に来ていた業者さんに、「すみませんが、この家の土地って何坪くらいあるんですか」と聞いたら、業者も変な顔をして私を見るんですね。「なんだ、この東洋人の女は、いきなり登場して」みたいな感じです。あれ、おかしいなと思って、「ちょっと販売パンフレットを見せてもらえますか」といって、それを見たんです。えっと思ったんですが、確かにそのパンフレットには、居間のサイズ、キッチンのサイズ、寝室のサイズと、各部屋の縦横のサイズは書いてあるんですけども、土地が何坪、何平米であるというようなことがうたっていないんです。小さな字でいろいろ書いてあるみたいなんですけど、普通は何平米とか総床面積とか書いてあるのになと思って、再度聞いたんですが、「そういう細かいことは家屋鑑定士かサーベイヤーが後で調べればわかることですよ。弁護士も調査に入るから問題ないですよ」と、怒られちゃったわけです。日本とは違う、イギリスの住宅に対する考え方がここにはっきりとあらわれていました。

イギリスでは、家売る時も買う時も、広さ、大きさ、サイズということを第1に考えないのです。広さを数値で知ろうとしない。これはすごいキーワードだと思いました。そして、不動産業者も、それをもとに、それを決め手に販売しようとはしないのです。それは何故かということ、家選びにおいてもっと重要なことがあるからです。

もっと重要なこと、それは何でしょうか。それは、その家が持つ個性、趣、特徴を、細かいところに至るまで買い手に伝えていくということだったんです。

(図20)

私は、早速、2部屋しかないコテージの販売パンフレットを英国から取り寄せてみました。皆さんと一緒にそれを見てみたいと思うんですけども、これが英国の住宅販売パンフレットなんです。

まず、これ、見ていただきますと、ここに写真が載ってございますが、キャッチフレー

ズといますか、非常に文字が少ないですよ。まずここに14万8500ポンドと価格が書いてあります。その横にフリーホールドと書いてあります。日本では所有権と借地権に分かれますが、イギリスでもそのような所有形態があるということで、フリーホールドというのは所有権ということですね。

このパンフレットを見ていきますと、すごく面白いことに気づかされるんです。

(図21)

四つ折の厚紙、全面にカラーでプリントされたパンフレットです。1戸の家に対してこのようなパンフレットが配られます。

日本との大きな違い、それは何かと言いますと、各部屋の写真をご覧ください。住んでいる人の、住んでいる状態を、家財道具もそのままに、まるでインテリア雑誌の実例集のように映し出しているということなんです。何故このようなことをするのでしょうか。

このパンフレットによって、家を購入しようとする人は、この家を買ったと、実際に私のあのテーブルはダイニングに置ける。ベッドを置いたらこのくらいの余りスペースが出る。キッチンの雰囲気はこのようになると、具体的に自分がその家に住んだイメージというものをつくりやすいんですね。売る人も、この家の素晴らしさをいかに伝えていくか、それにフォーカスをしているということなんです。

何故このようなことが発達してきたかと言いますと、イギリスというのは95%以上の方が築60年以上の超中古住宅に住んでおられます。ですから、その家を買った場合、どういうふうな暮らしになるのかということがすごく重要なポイントになるんですね。

(図22)

ある住宅広告を分解して、具体的にこの住宅パンフレットで何が書いてあるのか、見ていきたいと思います。

これはビクトリアン時代のタウンハウスですね。テラスハウスですね。いわゆる長屋式の住宅でございます、この白い部分の家が売りに出ております。下のほうに価格が書いてございまして、その横にフリーホールド、所有権ということが書いてありますが、当時のレートで200円計算しまして、この家は3300万円の家ですね。現在ですと2000万ちょっとということになります。

先程から気になる方もいらっしゃると思うんですが、この2行にわたった文章、これは、何が書いてあるかということなんですけれども、この家の説明が出てきます。「オールド

ローズの香る、ファネスの丘に建つ、1900年築の家。街路樹の連なる歩道に面した、ビクトリアン時代をほうふつとさせる、素晴らしい2寝室の家。そしてこの家の写真が展開されていくわけなんですけれども、「ラウンジの暖炉には石炭暖炉風のガスヒーターがあり、その周辺の見事なプラス装飾は必見」となります。そして、バスルームにいきますと、説明文の中で、「まるで中世さながらのビクトリアンスタイル。蛇口は伝統的なデザインのクロムメッキ製。壁のくぼみにはテレビも置けます」と書いてあるわけですね。

私は「はあー」と思いながら、イギリスに行くたびに不動産屋を回りまして、そしてパンフレットを集めては、そこに書いてある文章や写真を堪能するわけです。「へえ、こんな紹介の仕方があるんだな。楽しいな。」とってたわけですよ。

## 5 . イギリスで売り家になっている魅力的な家。(借地権 999 年の古城、湖が見えるコッツウォルズの古城)

話は脱線しますけれども、私が最初にイギリスに行ったのが19歳の時でございまして、最初にイギリスに引かれた理由をよく聞かれるんですが、中世のような家並みなんですね。いつかここに住んでみたい、『いつかイギリスに暮らすわたし』という本も書いたくらい、いつかイギリスに住みたいなど、この30年間思い続けてきました。

私がこういうふうにあちこちの不動産のカタログ、パンフレット、広告を趣味のように集める中で、先程皆さんに見ていただきましたが、苦心して建てた東京の吉祥寺の家を売ってでもここを買いたいという集合住宅を見つけたんですね。それで、私は考えました。

「あれだけ苦労して吉祥寺の家を建てたのに、血迷うな、私」と思ったわけなんですけれども、どうしてもどうしても、この家だったら、いつかイギリスに暮らすではなくて、今すぐ住みたいと思いました。その集合住宅を皆様に見ていただきたいと思います。この写真をお見せしますと、なんかイメージが変わったというふうに罵倒されるんですけども、ご覧ください。

(図22)

こちらです。イングランドとスコットランドの境にありますボーダー地方ですね、そこにある古城でございまして。集合住宅ですが、16世紀に建てられたお城です。このところが

集合住宅かという話になりますが、実はこのすべてが集合住宅なんですね。

イギリスの住宅事情をお話ししますと、先程私は、イギリスでは95%以上の人古い古い家に住んでいると言いました。それは必ずしも住宅の形態をとってない家なんです。例えばこのような古城であったり、元警察署、元小学校、元病院、あるいは灯台、水車小屋、何でもありなんですね。

私が集合住宅と言われて飛びつきました。業者のチラシによりますと、ルーフバルコニー付きの1LDKとあります。ルーフバルコニーってどこかといいますと、ここなんですね。ルーフバルコニー付き1LDK。

このお城、実は16世紀に建てられた古城なんですけれども、戦の激しかった時代で、壁厚たるや、大変なものなんです。この中の100室以上あるお部屋を、イギリスでは各住戸に区切るんですね。2LDKだったり、1LDKだったりというふうなつくりにして、内廊下をつけて、各住戸の玄関をつけて、再販するわけです。現在、30世帯が住んでおられます。

このルーフバルコニー付きの1LDKの私が飛びついた家の、価格なんですけど、私が何故買おうと思ったかといいますと、自分に手が届く価格だったんですね。当時のレートで5000万円ちょっとです。所有形態なんですけど、これは所有権ではなく、借地権です。借地権と申し上げておりますが、期限つきでございます。借地期間は何年かと言いましたら、999年なんです。999年ということは、10世代が住み継がれる。つまり、何かの形で所有権にできないけれども、永遠に住んでいいですよというような、そういう1LDKのフラットなんですね。

(図23)

中をもう一度ご覧いただきたいと思うんですが、これが私が買おうとしていた住戸のルーフバルコニーでございまして、各住戸の入り口というのはこのように内階段とか内廊下で結ばれております。

ルーフバルコニーは、ドラキュラの映画に出てくるような古い古い石造りのらせん階段が中を回ってしまっていて、そこを身をすぼめて上がっていくと、バルコニーなんですよ。

(図24)

昔のお城ですから、大砲なんか飛んできて、爆弾が飛んできて、びくともしないようにこの壁の厚さというのがすごいんですね。業者さんからは、いまだかつてないほどの

高気密高断熱住宅といわれたんですけれども、ちょっとご覧いただけますでしょうか。このくらいの壁厚がありまして、イギリス人はこういう住宅を、趣がある、素晴らしい家だというふうに絶賛して買うわけです。

私は、家族にも相談しました。余りにも舞い上がっていたもので、家族もよく事情がのみ込めないまま、いいだろうということですぐに申し込みを入れたんですけれども、そのとき既に先約が入っておりまして、泣く泣く諦めてしまいました。

その後もずっと後悔したんです。こういう素晴らしいフラットには、二度とめぐり会えないだろうなと思っておりましてところ、昨年、今日本でイギリスの中でも大人気のコッツウォルズ地方に売り物件を見に行った時、素晴らしいマンションを見つけました。カントリーハウスなんです。

(図25)

これ、実は今もまだ販売中です。皆さん、イギリスに行かれまして、集合住宅、マンションといわれても、侮ってはいけませんよ。何が出てくるかわかりませんからね。

これはコッツウォルズの元貴族が住まわれていたカントリーハウスでございます。すごいですね、この外観。カタログを見ました時に、ゲスト用の駐車場が80台使用可と書いてあったので、80人も車を運転して、ここを買っても遊びに来ないだろうなんて私、思っていたんですけれども、現地に行ってみて納得しました。

共有庭つきと書いてあったんですね。1LDKのこのカントリーハウスなんですけれども、共有庭ってどんな庭だと思いましたが、トラクターを運転した庭師が2人ばかり、庭をほじくってしまっていて、そのはるか向こうに湖が見えるんですね。それがすべて共有庭なんです。すごいなと思いました。

(図26)

入り口から入っていってみましょう。1LDKの住戸でございますが、なんと円高の恩恵を受けまして、現在、まだ販売されておりますけれども、販売価格が2000万円でございます。

これは共有部分の廊下、階段ですね。

(図27)

そして、イギリスの面白いところは、このような古い古いカントリーハウスですけれども、中だけは近代的にリフォームをしているということなんです。水回りもすべてきれい



です。ベッドルームも新しくなっています。

(図28)

そして、先ほどの共有庭ですね。ご覧になるとわかる通り、古いカントリーハウスから一歩外に出ますと、庭が続きます。

庭の中には東屋やもありまして、ガーデンパーティ、ガーデンウェディングもお好きにやってくださいということです。これで2000万円ですよ。すごいですよね。

私は、こういうところは、今まで一生自分には縁がないかと思っておりました。毎年「井形慶子とともにイギリスの家々をめぐる旅」といういろいろな一般の住宅や売り物件をめぐるツアーをやっているんですが、その中で、来年、ここを訪ねる予定でございます。それにしてもイギリスの住宅というのはいろんなものがあるのだなと、改めて思いました。

(図29)

先程の間取りです。53平米、1LDK、昔の古いお城をこのように近代的にリフォームをして、再販していくという考えですね。私は、こういうイギリスの家をずっと見てきて、改めて日本を振り返るわけです。

(図30)

日本の住宅広告にいきましょう。これが日本の住宅広告なんですけれども、記号のような言葉が並ぶわけです。「駅近」「日当たり良好」「室内大変きれいにお使いです」と、私たちが見なれた言葉が続きまして、リフォームに関して、全面リフォーム済み、注文建築、LDKが20畳ですよというようなチラシでございますね。

新築マンションの販売チラシに関してはもっと極端です。これは吉祥寺のものなんですけど、とにかく広い、80平米超、90平米超、ワイドスパンと、広さ、大きさ、明るさにフォーカスして売っていく。同じ住宅広告でも、住宅のチラシ、広告を見ていくと、イギリスと日本の家の違い、そのありようは大きく違っていくと思うんです。そして、この2つを見比べていくと、家に対する考え方から生き方の違いまで浮かび上がってくるわけです。

ここで基本的なところに戻りたいんですが、イギリス人と日本人の家の価値、考え方は違うということはわかったけれども、貯蓄額はどのくらい違うの。日本人の平均988万円、対してイギリス人は350万円しか貯金していません。これはすなわち老後の問題にもつながっていくわけです。住まいの問題は人生の問題、老後の問題にもつながっていく。

ああいう古い家に住んでいるイギリス人、しかも貯金は300万ちょっと。よほど国の制度がいいんだろうと言われる方もおられますが、どうも制度だけではないようです。

イギリスは今、大変な不景気で、いろいろな問題が出ております。医療にしても社会保障にしても、問題が出ております。

イギリス人にとって、家というのはあらゆる意味で人生の中心です。その理由を、私は3つ挙げたいと思います。

まず、イギリス人にとって、家というのは「節約」につながります。それは何故か。簡単にいきいたいと思うんですが、私たち日本人は、お客様と会う場合、喫茶店やレストランで会うことが多いと思います。イギリスの人々というのは、家は人を招く場所、人と出会う場所なんです。そこが大きな節約になっていきます。

それから、「職住接近」という問題があります。コンピュータの発達に伴って、イギリスでは近年、特にこの10年ほどでしょうか、会社を早期にリタイアして自宅で仕事をする方が大変多いんです。ですから、自分の家にホームオフィスをつくる、そこが仕事場になるということが大変多くて、昔、プレハブの勉強部屋なんてありましたけれども、田舎の一軒家なんかに行きますと、よく庭先に自分のホームオフィスを、倉庫を改装してつくっていらっしゃる方も多いんです。

そして、家というのは「財テク」になります。ここが大きな問題、ポイントです。イギリス人は、家を持った瞬間からその家をいかに活用するかという闘いの始まりです。家を見つめ、手を加えることで、どんどん古い老朽物件の資産価値を上げていくんです。

イギリスでは20代の若者が自分の家を買うということが大変盛んなんですけれども、日本人以上に家に対する関心が高く、毎週必ずどこかの放送局では、ぼろ家を買って、それをリフォームして1億円につり上げたというようなドキュメンタリー番組が放送されています。

私、今、ぼろ家という言い方をしましたけれども、本当に土台はぼろぼろなんです。それがどのくらい素晴らしいのか。日本の10倍くらい、不動産投資、不動産売買が盛んな英国では、今現在も外国の富裕層が、中国人を初めとして、どんどん家を購入しております。

(図31)

先だって、イギリスに行った時に、とんでもない新聞記事がありました。ロンドンの中

心部、ハロツズの目の前で、新しいマンションが今建築されています。そのマンションのトップフロア、ペントハウスを買った富豪のことがニュースで出ておりました。新聞のトップニュース、イブニング・スタンダードに出ておりましたけれども、この富豪は、なんとそのペントハウスを210億円で購入したんです。1住戸が210億円。これは日本では考えられない値段なんですけれども、何故このような高値がつくのでしょうか。1棟のマンションではなく、1住戸が210億円です。

このマンションは、確かにロンドンステータスがあるハロツズの目の前に建ち、そしてセキュリティも万全です。セキュリティというと、イギリスのCIAみたいなSASで訓練を受けた人たちが、セコムのようにセキュリティに入り、ミシュランクラスのシェフが24時間ルームサービスをするというくらいのマンションなんですけれども、平均販売住戸というのが60億円なんです。現在、7割売れています。名前は公表されておられません。国籍も不明なんです。報道によりますと、中国人、ロシア人、中東の方々がメインではないかと言われております。何故このように住宅を買いあさるのでしょうか。外国人もイギリス人も、家を持つということは財テクだと考えているのです。

1つの例を申し上げますが、イギリスの人々というのは、私、先程言いましたが、廃屋のようなマンションを買う、もしくはうんと地価が高い、こちらでいえば六本木ヒルズのようなところを買う。そして、買って性能を上げ、中をリフォームし、黙って持っておく。何故か。家の軒数が、買いたい人に対して圧倒的に少ないんです。日本は家余り社会なんです。英国というのは万年、家が不足しています。皆さんが家を買いたいのに、家を必要以上に開発させない、住宅開発をさせない、家をつくらない。環境を壊したくないということが1つあります。2番目に、タワー型住戸というのは英国では余り歓迎されていない。人々がなじまない。そういうこともあって、非常に住宅の数が限られているところにもってきて、ロンドンというのはニューヨークと同じ、世界のセンターですから、外国人も含めいろいろな人たちが買おうとする。住宅投資が大変盛んなんです。そこにもってきて、一般のイギリス人も家を買う。古い家を買ってリフォームをし、性能を上げ、性能が上がったところで売る。そしてまた次の家を買うという、はしごを上っていくわけです。

6 . イギリスの家は手を加えると ( D I Y でリフォーム ) 価値が上がる。安く買い、高く売る財テクだった。付加価値がつくイギリスの古家。

( 図 3 2 )

先ほど、住宅というのはあらゆる意味で人生の中心だと言いましたが、あるおばあさんのケースを見てみたいと思います。バンガローと呼ばれる小さな家に住んでおられます。この方、ご主人を亡くされて1人になりましたけれども、ちょっと考えてください。イギリス人は350万円平均しか貯金しておりません。老後に不安はないのでしょうか。不安がないんです。何故かと言いますと、住宅をリフォームしながら性能や部屋数をどんどん上げていき、そして最後、リタイアしていよいよ老後になった時に、売却するんです。減築の考えです。そして、その差益を自分の老後の生活資金として、生活費として全て使ってしまうという考えです。

( 図 3 3 )

このおばあちゃんの家ですが、家も庭も、自分が管理できる小さな家がいいということで、小さな住宅に住みかえをされて、それまで大きな家に住んでいたんですけれども、その差益で現在、生活をされております。

あるいは、家の一室にシャワーなどをつけまして、下宿人を置いて、そして現金収入を得る方もいるんです。

では、先程からリフォーム、リフォームと言っているけれども、現実的にどのようなリフォームを人々がなしているのか、具体的な例を見ていただきたいと思います。

( 図 3 4 )

イギリスでは、安い、廃屋同然の家をバーゲン価格で若い20代、30代のファーストバイヤーが買って、そして部屋数を増やし、リフォームしていくというお話をしておりますが、国際結婚のカップルの実例を見てみましょう。

日本人の奥様とイギリス人の旦那様ですね。30代のカップルです。

( 図 3 5 )

この家はコッツウォルズ地方にあります。1700年代に建てられた家です。

( 図 3 6 )

これが昔撮影されたこの町の写真なんですけれども、街並みは今も昔も余り変わってな

いですね。イギリスは、昔の古い写真を持ってきて今の写真と見比べてもほとんど変わらないというところが、観光立国として成り立っているところだなと思うんですが。

(図37)

そして、これは、購入時のダイニングルームなんですけれども、改築とともに、暖炉をまず取り外しました。

(図38)

これは、夫婦で張り直した床板なんですけれども、新しい床板に張り直してリフォームされているところです。リフォーム後の写真です。

(図39)

ここなんです、見ていただきたいのが、天井の梁と、正面に見えます、ハニーストーンといわれる、コッツウォルズで取れる古い石材ですね。実はイギリスではリフォームの最大のテクニックというのがあります、古い古い部分だけは絶対壊さないという鉄則があるんです。近代化できる、例えば水道管であるとかガス管とか電気とか、そういうところはどんどん新しくして構わないけれども、いわゆる価値のある石材や梁やドアは絶対捨てないんです。

(図40)

ベッドルームもそうですね。昔、暖炉だったところに使われていた石材の部分だけは、手を加えず残しております。

(図41)

増築された子ども部屋、これはご夫婦が一緒になってつくったそうです。

(図42)

これ、入り口の部分に見える汚い部分、昔の古い部分です。あえてこれは昔こうだったんだよということを撮影させてくれるために残してくれていましたけれども、このくらい、ぼろぼろだったところに増築を重ねていっている。これは昔の外壁だった部分ですね。

(図43)

玄関の外回りですね。このドアは約2万円で買ってきて、自分たちでつけたと言っております。

(図44)

そして、コンサバトリーと呼ばれる温室なんですけれども、イギリスでは裏庭に面した

ところにこのようなキットを取りつける家が今すごく多いんですね。ホームセンターなんかに行きますと、10万円台からコンサバトリーのセットというのを売っています。こういう自分たちでできる簡単なキットが、日本でももっと出回るといいなといつも思うんです。

(図45)

これもご夫婦でくっつけられたブレイクファストルーム、外から見るとこんなふうになっています。

(図46)

そして、裏庭ですね。草ぼうぼうだったところを、お2人できれいに整地をしてつくりました。

(図47)

これは昔のこの家のスケッチですね。

(図48)

そして、もともとのオリジナルの図面が出てきたんですけれども、こういった小さな家を増築、増築を重ねて、現在のような家にしたということでございます。

(図49)

この予算なんですが、どういうふうになっているかということですが、この築200年の古い家を、彼らは7年前に約2000万円で購入しました。これは当時のバーゲン価格です。リフォームにどのくらいの期間がかかったかといいますと、夫婦2人で7年越しでリフォームをされました。

ちなみに、この家のご主人は大学教授です。大学の講義の合間にやられていたようで、土日はずっとかかりっ切りだったようです。そのリフォームの総費用が1250万円です。合計でこの家に使ったお金というのは3600万円ですが、さて、それが現在、間取り3LDK、プラスコンサバトリー、プラス立派な裏庭ということで幾らになるか。ここがイギリス人が大好きな部分なんです。リフォームを自分たちでやり遂げて、落ちつきましたら、必ず不動産業者を呼びまして査定させるんです。私たちは、売ろうとする時以外、業者さんを読んで査定させるということはないんですけれども、イギリスの人たちは、でき上がったらすぐに電話をして、「我が家の価値は幾らかね」というふうに出してもらおうんですね。

それで出てきた金額なんです、これが7500万円になっていて、約2倍の価値になったということです。

こういうお話というのは、最初は面白くて、英国に行くたびに写真を撮ったり、メモをとったり、インタビューしたりしていたんですが、イギリスに行きましたら、ロンドンも地方も、それこそ掃いて捨てるようにこういうお話が転がっていきまして、これはほんとに当たり前のことだな、改めて紹介することでもないなと思うようになりました。

ひところ、よく聞かれましたアメリカンドリームというのは、一獲千金、成功をねらえ、ということですが、イングリッシュドリームというのは、廃屋を購入して、自分たちでせっせと価値を高め、そして価格をつり上げること。これこそイングリッシュドリームなんです。生活の場、生活の質に手を加えて豊かにすることが、ヨーロッパ型社会の象徴と私は感じるわけですね。大量生産ではない、消費型ではない、こういう価値ですね。

このような考え方が社会にどんどん広がっていきましたら、価値がないと思われること、もうこれは捨てたほうが良いと思うこと、部材や住宅建材とか住宅だけではなく、もしかしたら人材もそうかもしれません。そういったところまで価値がある、価値が作り出せるということになるのではないのでしょうか。

(図50)

最後のお話に行きたいと思うんですけども、私は2年前、イギリスに行きました時に、刑務所に行ってまいりました。ハイダウン刑務所という、ロンドン郊外のサリー州にある刑務所なんですけれども、人里離れたところにあります。

私が刑務所に行ったというふうに言いましたら、いろいろな方々から、ボランティアか、面白い囚人がいたのかとか聞かれるんですが、私はそこに世界一おいしいフランス料理を食べに行きました。そういうと、「何故、井形さん、刑務所にフランス料理を食べに行ったんですか」という話になるわけです。

実は私はイギリスの家についてたくさん話を聞き、本なども書かせていただいていますけれども、私は、日本はまだまだイギリスに学ばなければいけないことがたくさんあるのではないかなとかねがね思うことがあります。今からお話しするハイダウン刑務所で起きた出来事、起きている出来事というのは、私たちに大きな教訓を投げかけているのではないかと思います。

英国では刑務所のカテゴリーというのが上からA B C Dとありまして、ハイダウン刑務所は男性専門の刑務所でカテゴリーBに属しています。麻薬の密輸などで捕まった人々が服役している刑務所です。麻薬の密売や輸入ですから、当然、イギリス人だけではなく、日本人もいますし、世界中の人がいるわけです。

この刑務所の中に、「クリンク」というフレンチレストランが2009年5月にオープンしました。これは、ロンドンの五つ星レストランの元シェフであったクリスティーさんのレストランです。この方は、これもイギリス人らしい生き方なんですけれども、セレブシェフとして名をはせていたんですが、何を思ったか、ハイダウン刑務所の料理人となって、ここで働き始めまして、彼が発起人となってスタートをしたフレンチレストランなんです。

2年前、彼と会った私は、「何故あなたのようなセレブなシェフが、こんなところでフレンチレストランを始めようと思ったんですか」と聞きましたところ、クリスティーさんは、ここで料理人をやっていて一番つらかったこと、嫌だったことというのは、せっかく刑期を終えて出所するのに、ほとんどの人が戻ってくるということなんです。一部芸能人なんかの報道でわかりますように、麻薬やドラッグというのは常習性があります。そして、英国は、今でも緩やかな階級社会です。このような麻薬、ドラッグに手を染める人々というのは、もともと移民の方であったり、貧困家庭であったり、教育を受けてなかったり、暴力を受けて育ったりと、そういう環境の方が多いんですね。出ていっても仕事がないんです、行くところがないんです。で、結局同じことをやって戻ってくる。どうすればいいんだろうとクリスティーさんは考え、料理人を続けていました。

ある時、刑務所の有刺鉄線の中をぶらぶら歩いていた時に、古い古いリネンや囚人のシーツが入った倉庫を見つけるわけですね。先程から皆様に、耳にたこができるほど私が言っている、老朽物件、ぼろ家、倉庫でございます。何の価値もない倉庫です。そこに、刑務所で使うたくさんのシーツなどがおさめられていました。彼はそれを見て思うんです。ひらめくんです。ああ、ここをレストランにすればいいと。

これがイギリスのすごいところなんです、突如として彼がイメージした、刑務所の中にフレンチレストランをつくるということにすぐに有志の人が集まりまして、イギリス中の金持ちに電話をするわけです。今日こちらにお越しの皆様のように、いろいろな業界の方にも電話をする。電話をかけて、私のこの考えに何とか協力してもらいたい、話をした



いから、ハイダウン刑務所に幾日に来てほしいと言います。イギリス中のアッパークラスのセレブ、貴族、金持ちが集まりました。そして、クリスティーさんは、その人たちに倉庫を見せて、ここをレストランにしたいというわけです。

このハイダウン刑務所には1000人の受刑者がいます。1000人の全ては変わらないかもしれない。だけれども、1年間、受刑者に使われている費用は6400万円もする。私が試算したところ、このレストランを運営するのに、初期投資1600万円で済む。ならば、更生させる方にかけてみませんかということで、一生懸命話をするわけです。そうすると、イギリスというのは、決断が早いですから、「よし、わかった。金を出す」という人が続々とあらわれます。言い出しっぺも必ず私財を投じるんです。彼自身も、400万円近い自分の貯金をはたきまして、ハイダウン刑務所も寄附をしまして、イギリスの金持ちから集めた総費用が約9000万円。それで、スタートする準備を進めるわけです。

彼は考えました。単にここで服役をさせるのでは何も変わらない。この囚人たちにレストランを運営させ、私が自分で培ったシェフとしての腕を教え込むことで、ここを出所した暁にはロンドンの一流レストランの試験を受けて職を得ることができる、そこまでの技術を身につけさせたいと思うわけです。

彼は、次に、どういう人たちをこのレストランで働かせるかということで、いろいろと条件を出しました。囚人たちを面接していくわけですが、品行方正、まじめというのは当然のことながら、彼が出した最大の条件というのは、服役期間が1年以上ある人ということなんです。まじめで、あと3カ月くらいで出る人というのは駄目なんです。それは何故かということ、彼が持っているシェフとしての技術を継承するのに1年はかかるという考えのもとなんです。そして、選びに選ばれた囚人たちが集まってまいりました。

このころから英国中にニュースが流れまして、大変な騒ぎとなるわけですね。刑務所の中にレストランができる。イギリス人は、こういうユニークな考えというのは好きですから、いろんなオファーが出てくる。取材が殺到する。

そういう中で、いよいよオープンを前にして、支配人が要る、支配人を誰にしますかと刑務所から聞かれるわけです。ところが、クリスティーさんは、既に目をつけていた人がいたんです。それは、このハイダウン刑務所に5年間服役していたスペイン人のフランシスコさんです。この準備中、彼は、刑期を終えて、この刑務所を出ていきました。みんなから「おめでとう。今日からあなたは塀の外に出られますね」と言われて送り出される1

人の元受刑者がおりました。スペイン人のこのフランシスコさんなんですけれども、ところが、私たちの想像では感じ得ないような複雑な心境というのがあるそうです。ここを出たはいいが、行くところがない。スペインからやってきた自分は家族もない。とりあえず今晚はホテルに泊まるけれども、一体この先、仕事をどうしようと思いつつ、とぼとぼとこの刑務所を後にして出ていくわけです。

そして、彼は安宿に泊まりました。明日からどうしようかな、仕事をどうしようかな、どうやって働こうかなと考えてた時に、1本の電話が入るわけです。顔見知りの刑務所の料理人、クリスティーさんからです。「出所、おめでとう」という電話だったんですが、「ところで、あなたにお願いがあります」と突然電話口で言うわけです。「元受刑者の私に何でしょうか」と言うと、「お願いですから、明日からハイダウン刑務所に戻ってきてもらえませんか」と。彼は意味がわからずびっくりするわけですね。「何故私が戻らなければいけないんですか」「あなたを、ずっと自分は見ていた。あなたには才能がある。つきましては、あなたを是非、私が考えている『クリンク』というフレンチレストランの支配人に採用したい」と言ったんですね。電話を受けた方は、そういう計画も知らないものですから、驚いて、そして大変感動して、「私でよければ、是非働かせていただきます」ということで、刑務所に戻っていくわけです。

クリスティーさんは言っていました。親の顔も知らない、複雑な家庭環境で育った人、自信のない人、生きていく力のない人がハイダウンにはたくさんいる。私の仕事、このレストランの仕事というのは、そういう人に目標を持たせることだということですね。

実は私は今年の6月、日本で初めて一般のお客様をこのレストランに、私のツアーで案内したんです。是非ともこれは皆さんにも行っていただきたいと思うんですが、何しろ料理がおいしいんです。最初に料理を食べた時に、カニのラビオリというのを食べたんですけれども、余りのおいしさにびっくりしてしまいました。何でこんなカニのパスタがおいしいのかと聞きましたら、ここにまた、この刑務所のレストランの秘密があったんですけれども、イギリスというのは、実は日本と同じく、地方経済が大変苦しい中にあります。この「クリンク」では、スタートする時に、英国中の、まじめに畜産をやっているけれども、商売が上がったりのところ、いいお魚をとる漁師さん、オーガニック農園とダイレクトに契約を結びまして、毎日毎日、物すごい数のお客さんが来ますので、いろんな食材を空輸してもらっているんです。ですから、私がその日食べたカニのパスタというのも、朝

到着した生のカニを、囚人みんなでさばいて、パスタの中に練り込むということをして出していたようなんですね。

それと同時に、このレストランで現在働いている囚人というのは選び抜かれた20人なんですけれども、それ以外にも、ハイダウン刑務所のことが大変話題となりまして、クリスティーさんたちは刑務所の空き地に今度はオーガニック農園をつくりまして、刑務所の囚人に農業を教えたり、余った区画に家具工房をつくりまして、そこでつくった家具、調度品もすべてこのお店のインテリアに使っているんですね。ロンドンでめったに見られないくらい一流のレストランができた上に、その中にバンケットルームもできて、イギリスのお金持ちの人たちはここでパーティやいろいろなレセプションなんかも行っているということでございます。

クリスティーさんは言っていました。スキル、そして未来を自分で設計できる力というのを、自分はこのレストランを通じて囚人たちに与えたかったと。最近、私がお目にかかりました時に、すごく嬉しいことがあったと言うんですね。それは何かと聞きましたら、ここを出所された方、「クリンク」のレストランで働いていた方が、ロンドンの五つ星レストランで一般の人たちと同じシェフの試験を受けて、見事、合格されたそうです。

私も最初ここに食事に行った時には怖かったですよ。レストランといっても、最初に刑務所に入っていくのに、鉛筆1本持てないわけです。3人くらいのスタッフと行って、彼がいった言葉というのをパーツ、パーツで暗記して帰ってきたんです。パスポートから何かからすべて入り口で没収されて、中に入っていくのに、5回くらい鉄条網をくぐっていかないと駄目なんですね。しかも、ナイフとフォークは、ピクニックに持っていくようなプラスチック製なんですよ。給仕をする人も、黒人、有色人種の方が多いんですけれども、入れ墨をしている方、声がガラガラの方とか、とにかく食事をしながらも、厨房ではナイフ、包丁で肉をさばいたりしているわけで、あれを持っていきなり飛び出してきて人質にとられたらどうしようなんて思ったわけなんです。

私がびっくりしたのは、今年の6月、日本人のツアー客を連れていった時に、隣のテーブルでイギリスのお金持ちたちが食事をしていたんですけれども、有名な設計事務所の方々が中におられました。イギリスのいろいろなランドマークなんかつくっている方たちだったんですけれども、この刑務所の中の内装工事をその方たちがやったということを誇りに持って語っておられました。

私がこういうお話をしましたところ、日本からも今、新聞などの取材も来ていまして、来られた記者の方々が、こういうお話は是非日本の政府の方、役人の方々が視察に行つて、何かしらできるのではないかと、もっとそういうお話をしてほしいというお声もたくさんいただきました。

私は、今まで、イギリスの古い家のお話を中心に、捨てられていくもの、私たちにとっては価値がないと思われるものから価値を見出す、それがひいてはいろんなビジネスの可能性、住宅の可能性、建物の可能性を生み出すことにつながるのではないかとということをご提案いたしました。

私がハイダウンのことをお話ししましたら、いろいろなところから、現在取材の申し込みが来ております。

## 7. 家づくりとは、住まいに命を吹き込む作業

(図5 1)

つたないお話をさせていただきましたけれども、たった1枚のタイルにも可能性を見出す昨今でございます。

ほんとに最後になりますけれども、英国では、古い古い、100年前のねじを売るお店もあれば、このような手づくりタイルをせっせとつくる業者の方もいらっしゃる。このようなタイルを1枚門柱に張るだけで、こういうふうに家が変わりますよという提案をされていく。

(図5 2)

これは、先だって阪急百貨店の梅田本店の英国フェアで私がご紹介したタイルです。

(図5 3)

こちらに出てきましたのは、超ローコストで日本の古い家をリフォームできないかということ私がお話した1つの事例です。日本ではユニットバスで、なかなか普及しないタイルなんです、イギリスではタイル大好きでございます。

(図5 4)

このようにいろいろな手書きタイル、手づくりタイルがございます。

普通の標準キッチンにタイルを加えるだけで、このようにキッチンが変わりますよとか、このように洗面台が変わっていきますよというようなご提案をしましたら、1枚のタイル、1つの部材なんですけれども、それに大きな夢を持って、皆さんが商品価値を見出して購入される。そこには、手を加え、何か作り出していくことの面白み、価値、捨てられていくところに1つの大きな可能性がある。何かそれを提案できるビジネスがもっと花開いていくというようなことを伝えていけないだろうかと思っておる次第です。

(図55)

ちなみに、このタイルをつくっているご夫婦は、元画家と元彫刻家でございますけれども、このカップルがつくるタイルというのは、今、アメリカ、オーストラリアなどを初め、世界中と取引をしております。この小さな工房の1枚のタイルというものが作り出す、提案する価値は大きなものがあります。

私は、先だってもイギリスで築120年経った古い住宅を実際にリフォーム工事してみました。そこで感じたことなんですけれども、日本のたくみの技術、大工さんの力、特に耐震における技術というものは素晴らしいものがある。何かそういったものをパッケージ化して、中国を初め、海外に輸出できないだろうか。そのことを、ずっと一人で考えておりました。何人かの方にはご提案申し上げてお話をしておりますけれども、世界一と、私はイギリス人が行うリフォームに点をつけたいと思いますが、日本のこの技術というのはそれに対して世界一のものがあるんですね。イギリスが素人技術を楽しむ社会だとすれば、日本というのは、ほんとにミリ単位狂わない、素晴らしいたくみがいて、素晴らしい技術がある。中国の内部のいろんな老朽物件を取材していくと、耐震の「た」の字も考えないような建物が山ほどあって、そういったところに、日本の公団をリフォームをして、それをモデルハウスとして技術を輸出すれば、どんなにすばらしいだろうか、どんなにか外貨が稼げるのではないかと、素人考えながら思っております。

まだまだお話は尽きないんですけれども、私たちが何気なく通り過ぎていく価値の中、見なれた、捨ててしまってもいいようなものの中から新しい可能性というのは生まれると信じております。

今日は本当に長いこと、ありがとうございました。(拍手)

谷 井形先生、ありがとうございました。イギリス人の、生活の場を豊かにする、生活を豊かにするというお話から、イギリス人の暮らし方というのがよく伝わってきました。今

日のお話の中には環境という言葉は1つも出てこないんですけれども、古い物を大事にするということが環境に配慮されているということがよく伝わってきました。どうもありがとうございました。先生にいま一度盛大な拍手をお送りください。(拍手)

以上をもちまして本フォーラムを終了させていただきます。本日はありがとうございました。  
(了)



井形 慶子 氏